

新米の思い出

附属新潟中学校

二年

加藤

央己

一昨年の秋から、我が家のお米が変わってしまっただ。このことは、僕にとっ青天の霹靂ともいうべき出来事だ。それまでは、祖父母の知人であるNさんが作ってくれたお米を食ってた。毎年新米が収穫されると、Nさんはトラップヤ、て来て、三十俵の米袋を軽々と持ち上げ、家に運び入れていた。幼頃の僕は、兄と一緒に次々と運ぶNさん

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

の後を追っかけた。足元をうらつくので邪魔だったはずだが、Nさんは嫌な顔もせず、お、元気がねえ。と、笑顔を見せにくれた。僕は、そんなNさんの隙を見て、とんとん積み重ねられていく米袋をボンボンとたたいてみたり、体重をかけたみたりしていた。今思えば、運びやすけいように天候の良い日を選んで来にくれていたのだろう。Nさんのやって来る日は、いつか晴天だった記憶がある。そーそー、Nさんは

一息つき、その年の米の出来映えを語り、お茶を飲みながら、僕達兄弟との共通の趣味である書道の話をしていく。上達を褒めいく。たり笑ったりして過ごした。そんな時間が僕には楽しく好きだった。

その日の晩は、必ずNさんの新米が食卓に上り、家族皆で頂いた。茶わんに盛り付けたほかほかの炊きたいの御飯は、寶石のようにキラキラとしていて、食べるのがもったいない。と思うほどだった。おかずも秋刀魚やさのこ

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

なと秋を感じるものが並び、季節の変化を知る日でもあった。御飯がとも美味しくて、兄と競うようにおかわりもしたものだ。だから、僕は毎年わくわくしながら、新米が出来ること、そして我が家に届くことを心待ちにしていった。

しかし、いつからかNさんが自分で米袋を運ばなくなり、祖父母が荷台から下ろすようになつて、そのうちNさんの家へ直接お米を受け取りに行くようになった。そ

して、ついにNさんは米作りを引退すること
 となりました。僕は、その時初めてNさんがや
 ースメーカーを付けながら米作りを頑張っ
 いたことを知った。残念ながら、Nさんの息
 子さんが米作りを引き継ぐことはなく、水田
 はあるのに作り手がいないという農業の現実
 に直面することになった。恐らくNさんだけ
 下なく、農業従事者の高齢化は、僕の知らな
 いところへ進んでいって、深刻な問題なのでは
 ないかと思っただ。僕は、自分の無力さを感じ

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

た。ずっとと味わってきた美味しいお米を食べ
 られなくなっただことは、非常に残念だ。だが、
 今までの感謝の思いの方が強くなり、その年
 は新米ではなく、残ったNさんのお米を
 炊いてもらって一口一口味わうように、ありが
 たく頂いた。この日の食卓下は、なぜか家族
 皆の口数が少なかった。

今でも時々、僕は連れっ行ってもらう、たN
 さんの田んぼで稲穂が元気に育っていった様子
 やNさんの優しい笑顔を思い出す。

とうしてNさんの新米が届くことを当たり前のように思っていたのだろう。何故いつまでも変わらないう思っていたのだろうか。毎日御飯が頂けらということは、とても有難いことなのだ。僕は改めて知ることが出来た。生産者の名前や顔が分かるお米には、消費者もつなかりを感じることがある。でも、市販されたお米にたいして、僕達消費者の知らない生産者の方が、きっと懸命に作業をこらねて収穫の喜びを感じ、自分の子のように愛

全国納税貯蓄組合連合会・国税庁

しく思ってお米を出荷してくはたに違いない。そんなことを考えながら、現在の僕の「頂きます」と言うことには、たくさんの人への深い感謝の気持ちがある。